

(別紙2)

水稻の高温被害に伴う農作物技術対策について

令和6年12月18日
農 業 支 援 課

令和6年6月から9月の高温による災害について、埼玉県農業災害対策特別措置条例に基づき特別災害に指定しました。これにより、水稻における農作物技術対策資料を以下のとおり作成しましたので、参考としてください。

1 播 種

- (1) 田植予定日から、稚苗では15～20日前、中苗では25～35日前を目安に播種を行う。
- (2) 苗の種類に合わせ、適量を厳守し播種する。
 - ① 稚苗：1箱当たり乾粃で180～200g（催芽粃は重量で220～250g、容量で400～450ml）
 - ② 中苗：1箱当たり乾粃で100～120g（催芽粃は重量で125～150g、容量で200～250ml）
- ※ 箱数の目安は、10a 当たり稚苗で13～15箱、中苗で22～28箱とする。
- (3) 留意点
 - ① 田植時期が遅い場合は、気温が上がり苗の生育が進むため、育苗日数は短くなるので注意する。
 - ② 育苗期間が長くなると苗が老化し、活着や初期分げつの発生が劣るので、作業予定を十分検討して播種を行う。
 - ③ 厚播は軟弱で徒長した苗になりやすいので、適正播種量を厳守する。

2 施 肥

- (1) 品種、田植え時期に応じて、「水稻栽培基準」の施肥基準に準拠し、適正な施用を行う。
- (2) 側条施肥の場合は基肥施用量を施肥基準より、2割程度減肥する。
- (3) 緩効性肥料を用いる場合、施肥基準（基肥＋追肥）より1～2割減肥する。側条施肥移植と併用の場合は3割程度減肥する。
- (4) 留意点
 - ① 良食味、良質米生産を図るため適切な施用量とする。
 - ② 土壌肥沃度、土壌条件等に応じて施肥量を加減する。
 - ③ 追肥及び穂肥は天候及び生育状況に応じ、施肥時期、施肥量を決める。
 - ④ 品種により葉色の落ちにくいものもあるので、葉色に惑わされず適期に追肥を行い、原則、晩期の追肥は行わない。
 - ⑤ 側条施肥の場合は肥料の吐出量等を十分調整する。
 - ⑥ 基肥一発肥料を用いる場合は全量基肥施用とし、追肥は原則として行わないが、穂肥時期に葉色が極端に淡い場合は、穂肥を行う。

3 高温対策

(1) 耕深を深くする

作土層を広げ、根域を拡大して根量を増やすため、耕深 **15cm** を目標に耕耘を行う。
すでに **15cm** 確保されているほ場では、更に **2～3 cm** 深く起こすよう努める。

(2) 有機物施用による土づくり

地力を高め、肥料切れによる栄養不足を防ぐため、完熟した堆肥を 10a 当たり **1～1.5 t** 施用する。

(3) ケイ酸資材を入れる

寒暖の変動や倒伏、病害虫等の諸障害に対する抵抗性を高めるため、ケイ酸資材
(例：ケイカルなら **10 a** 当たり **100kg** 程度) を施用する。

(4) 出穂時期をずらす

高温による被害が集中しないよう、危険分散を図るため、可能な範囲で田植え時期
を遅らせるか熟期の異なる品種を組み合わせで栽培する。

(5) 中干しを適期に行う

過繁茂による肥料切れや籾数過剰を防ぐため、田植時期と品種毎に目標とする茎数
が確保できたら直ちに落水し、小ひびが入る程度の中干しを行う。ただし、中干し後
の用水量不安がある場合は、歩いて田面に足跡がつく程度の中干しとする。

(6) 追肥や穂肥を適期に行う

肥料切れによる登熟期の養分欠乏を防ぐため、作期と品種に適した追肥、穂肥を栽
培基準に準じて施用する。

(7) 穂ばらみ期からの水管理は基本技術を励行する

出穂～開花期に必要な水分の十分な供給と根の活性を維持するため、穂ばらみ～穂
揃いまで深水で管理する。その後、登熟期間中は間断かん水を行い、出穂から 30 日目
までは完全に水は落とさない。登熟期間に高温や強風となる場合は一時的な深水を行
う。

(8) 適切な害虫防除を行う

高温の影響によりカメムシ等の害虫発生が多くなるため、適切な害虫防除を実施す
る。近年は特にイネカメムシの発生が多いので留意する。

(9) 適期収穫

玄米の品質低下を助長させないため、日平均気温の積算値を基本指標として、出穂
後の日数、籾の退色の様子を確認し収穫適期を判定する。高温年は籾の退色に比べ、
早く適期が訪れるので、早めの確認と収穫作業を心掛ける。

※ 暑さに負けない「彩のかがやき」栽培指針（令和 6 年 5 月作成）等より

- ・農薬を使用する際は、ラベルや袋に表示された使用基準を必ず守って使用しましょう。
- ・農薬の飛散防止に努めましょう。農薬の使用記録簿をつけましょう。